



子どもとの距離感について、意識したことがありますか。普通、そんなこと意識せずに過ごしていってしまおうと思うのですが、今日はそのことについてお話ししたいと思います。

学校では、5年生の学習の中で「メダカ」を教材として扱う単元があります。だから、5年生を担当することになると、メダカを手に入れて育て、観察等していくことになります。

そのメダカをどのように手に入れるのかというと、ひとつは教材屋さんから買う方法があります。その他には、学校にピオトープ等があれば、そこで捕まえることもありました。

僕はどちらのメダカも、教材として使ったことがあります。この二種類のメダカ、大きな違いがあるのです。なんだか分かりますか。それは、生存率です。子どもたちと一緒に世話をしていますが、それが十分できないこともあります。水槽の環境が悪くなってしまうと、買ったメダカは、次々と死んでいってしまうのです。それに対して、ピオトープで獲ったメダカは、ちょっとやそっとのことでは死にませんでした。同時に同じ環境で飼育してみても同様でした。

この違いがどこから来るのか、思い当たることがあります。それは、メダカたちが育ってきた環境です。売り物として手厚く面倒を見られながら僕の学級に来たメダカに比べ、ピオトープのメダカたちは、自力で餌を捕り、雨が降らなければ、極端に水が少なくなってしまうような環境で、時には敵に襲われながら、育ってきています。売り物のメダカと自然の中で育ったメダカが一番大きな違いは、この育った環境だと思うのです。

このことは、子育てについて大きな示唆を与えてくれると考えます。それは、親と子どもとの距離に関係することです。

子どもたちを「メダカ」、ご家庭や親御さんの関わりを「環境」としましょう。子どもは、親にとってかけがえのない大切で守るべき存在です。だからつつい先回りして、子どもを守る方向で動いてしまいがちのところはないでしょうか。

二つの例をあげますね。例えば、修学旅行やキャンプでのエピソードです。お泊まりの準備で、忘れ物をしたら子どもが困ると、すべて親御さんがやってしまったケースがありました。この子は、忘れ物こそなかったものの、急に雨に降られても、さっと雨具を出すこともできませんでした。旅行を終えて、お迎えのお家の方に子どもたちを引き

渡すとき、自分の荷物を親御さんに持たせる子どもや、持ってあげる親御さんの姿も見かけました。

また、数年前には、こんなニュースもありました。50代の父親が、小学生の娘の同級生の顔を数回殴って土下座させ、逮捕されたという内容です。帰宅した娘さんが泣きながら、「傘でなぐられた。」と訴えたことが、きっかけだったそうです。

この二つの例をお読みになって、どんなことをお感じになったでしょうか。

僕は、この両方とも、子どもとの「適切な距離」がとれてない状況だと感じました。ひとつ目は、子どもがすべきことなのに、距離が近いところか自分が肩代わりしてしまっています。**親の心配を解消することが優先されているのに、おそらく「子どものために」と思うことで、そのことには気づけていないとも思います。**二つ目の例は、お子さんの様子を見て、親が腹をたててしまい、自分の不快感情を解消するために行動してしまっています。こちら「子どものために」と**ご自身の怒りを収めるための行動**だとは、思ってもいないでしょう。子どもとの距離が近すぎて、気持ちまでも同化してしまい、子どもの問題がご自分の問題となってしまっています。

ここで、考えていただきたいのは、子どもは**自分の人格を生きる一人の人間**だということです。親の一部でもなければ、所有物でもありません。これから待ち受ける様々なことに立ち向かっていかなければならない存在です。

そう考えると、その傍らに寄り添う親もまた、ひとりの人間としてしっかり立たねばならないのです。どんなに心配でも、どんなに頭にきても、子どもと同化してしまってはダメです。きちんと人として、互いの人生を歩むそれぞれの存在として、そこにいる必要があります。

親は、その距離感の中で、子どもが問題に向き合っていくために「何をすべきなのか」「どう支えられるのか」を全力で考えてほしいと思うのです。今、目の前で起きているその問題は、**子どものもの**だからです。もちろん、親が肩代わりすべき緊急の事案があることや、成長によってその関わりが変わっていくことは言うまでもありません。

保護者のみなさんに忘れないでほしいのは、僕らはいつでも、「**子どもより大きく、子どもより強く、子どもより賢く、そして優しい存在**」でありたいということです。